第 14 回「リリー・オンコロジー・オン・キャンバス　がんと生きる、わたしの物語。」参考資料

＜募集・審査概要＞

募集期間	2023 年 8 月 22 日（火）～2024 年 1 月 31 日（水）
応募件数	絵画部門　38 件　　写真部門　49 件　　絵手紙部門　39 件
募集テーマ	「がんと生きる、わたしの物語。」
審査	【最優秀賞、優秀賞、入選】 絵画・写真・絵手紙作品ならびに制作背景を綴ったエッセイについて、作品の技術的・芸術的な評価よりも募集テーマを的確にとらえた作品であるかを重視し、以下 5 名の審査員により 2024 年 4 月 12 日に審査が行われ、最優秀賞、優秀賞、入選の計 12 点を決定しました。
審査員	岸本 葉子（エッセイスト） 森 香保里（四国こどもとおとなの医療センター 臨床研究部 アートサイコセラピスト） 亀山 哲郎（カメラマン） 堀 均（日本対がん協会） 西村 詠子（NPO 法人がんとむきあう会）　※順不同／敬称略
賞	最優秀賞（各部門 1 名）、優秀賞（各部門 1 名）、入選（各部門 2 名）

＜受賞者一覧＞

【最優秀賞】
絵画部門：　三村　麻子（みむら　まこ）さん　（岡山県）『今日も紅をさす』
写真部門：　青木　朱那（あおき　あやな）さん　（静岡県）『勇気の蝶』
絵手紙部門：　谷口　佳江（たにぐち　よしえ）さん　（千葉県）『おとなになった　あなたへ』

【優秀賞】
絵画部門：　木村　知佐子（きむら　ちさこ）さん　（和歌山県）『あの日の風景』
写真部門：　久保田　将（くぼた　まさる）さん　（埼玉県）『約束』
絵手紙部門：　神谷　雅春（かみや　まさはる）さん　（千葉県）『小さなことに喜びを』

【入選】
絵画部門：　西村　育恵（にしむら　いくえ）さん　（福岡県）『希望の光を求めて』
絵画部門：　髙橋　よし江（たかはし　よしえ）さん　（宮城県）『キセキ』～すべてに感謝～
写真部門：　熊澤　明子（くまざわ　あきこ）さん　（高知県）『二人で来た道、これからも』
写真部門：　高橋　賢（たかはし　さとし）さん　（東京都）『最後の手打ちうどん』
絵手紙部門：　松原　エミ（まつばら　えみ）さん　（岐阜県）『かぞくのじかん』
絵手紙部門：　上野　哲志（うえの　てつし）さん　（神奈川県）『朝日さす』

＜受賞作品・エッセイ＞

【最優秀賞】 絵画部門
三村　麻子（みむら　まこ）さん　＜岡山県＞

『今日も紅をさす』

■作品エッセイ（抜粋）
2023 年、人生のどん底で追い打ちをかけるかのように医師から「直腸に直径 11 ㎝を超える腺腫というものがあり、一部は癌の可能性…ウンタラカンタラ…命を守るためには人工肛門…大きな病院で…」ちょっと何言ってるかわからない。紹介状を持ちその病院へ向かい医師の前へ座る。
医師のその顔のその口が放つものは説得力があり安心感を生む。“「生きる」という問いの前に立たされそれにどう答えるかが私たちに課された責務なのだ”という言葉を何かで読んだことがある。その答えが導けそうだ。
無事手術も終え、私は今、得意を伸ばすと何かの役に立てやしないかと絵を描いている。
おかげさまでたまの好物くらいは楽しめていると、命の恩人に報告したい。ありがとうとつぶやきながら、私は今日も紅をさす。

【最優秀賞】 写真部門
青木　朱那（あおき　あやな）さん　＜静岡県＞

『勇気の蝶』

■作品エッセイ（抜粋）
右乳房を全摘出することに決めた、1 週間後。ふと縁台でぼーっとしていると、洗濯物に何かがとまっているのがみえた。よく庭でみかけるアゲハ蝶。
“あれ？片方の羽が欠けてる！私と同じだ…！”驚きと嬉しさとでいっぱいになりながら、慌てて撮ったのが、この 1 枚。
当時、23 歳。片胸をとるという選択をするまでの約 1 ヵ月、毎日毎日悩んで考えた。決断をしても、本当にこれでよかったのかな、片胸がなくても幸せに生きてゆけるのかな、女性としての何かを失ってしまうようで、怖くもあった。“大丈夫、片方の羽が欠けていても、わたしはこんなに美しいでしょう？”蝶がそう言っているように感じた。蝶は、私が写真を撮り終わっても、しばらくそこで羽をパタパタ動かしながらとまっていてくれた。“ありがとう。きっと私は大丈夫だね。”あれから 6 年、私は今も私のまま、幸せに生きている。前向きに生きてこられたのは、あの蝶のおかげ。今度は私が届ける番。私がもらった勇気が、誰かにふわりと届きますように。

【最優秀賞】 絵手紙部門

谷口　佳江（たにぐち　よしえ）さん　＜千葉県＞

『おとなになった あなたへ』

■作品エッセイ（抜粋）

乳がん告知は 33 歳の春、娘は 2 歳になったばかり。

万が一の時、この子が一人になっても、「生きる力」をつけておきたかった。3歳になってすぐに台所へ立たせた。小さな脚立に立って、大人の包丁で練習した。「食べることは生きること」。自身の病気と向き合う時も「食」は欠かせなかった。どんな料理も一緒に作り、治療中も台所に立ち続けた。

「ママは台所へ入らないで！」。今年 38 歳の私の誕生日に、6 歳の娘は一人で台所へ立った。脚立から小さな椅子に昇格した。いびつなおにぎり、不揃いの野菜がたくさん入ったお味噌汁、甘すぎる卵焼き…。まだまだ小さな子どもと思っていたのに。涙が溢れて止まらなかった。この日を生涯、忘れることはないだろう。

18 歳の彼女はどんな人になっているだろうか。私は会えるだろうか。私との台所で過ごした日々を、あなたのことが大好きだったことを、覚えていてくれるだろうか。たとえ叶わなくとも、おとなになっていく彼女と、「今」を精一杯　生きている。

【優秀賞】 絵画部門

木村　知佐子（きむら　ちさこ）さん　　＜和歌山県＞

『あの日の風景』」

■作品エッセイ（抜粋）

輝く海と青い空、それから白い岬の青と白のコントラストが目に焼き付いて、又絶対にこの美しい景色を見に来ようと思った。それは生まれつきの障がいのある長男と訪れた海辺だった。体調は最悪だったが、美しい景色にとても癒された。それから間もなく、直腸癌であることが発覚し、放射線治療、手術、抗がん剤治療を終えて 5 年が過ぎました。息子の小さかった頃は、すべてが大変でしたが、いざ命にかかわる病気になると、「生き抜くぞ、息子を置いては死ねない」と思った次第でした。

そして、術後は永久ストーマになりました。幸いにも再発することもなく、現在は事務作業のしごとに就いて、忙しい日々を送っている。いまの仕事をやり切った後は、利用者さんに寄り添った介護者になりたいと野望も抱いている。今、若い人の大腸がんも多くストーマを持つ方もいると思います。私も、最初は苦労しましたが、徐々に慣れ以前と同じ生活が送れていて、あの日の風景にあいに出掛けている。闘病中の方も、どうか自身の癒しが見つかりますように、心からお祈り申し上げます。

【優秀賞】 写真部門

久保田　将（くぼた　まさる）さん　　＜埼玉県＞

『約束』

■作品エッセイ（抜粋）

娘の神経芽腫が寛解して 4 年が経った小学3年生の夏休み。画像検査で異常があった・・・再発だ。今、娘は 9 歳。最近は自分の病気に関心を持ち、同じ病気だったお友達が、お星さまになったことも知っている。治療が必要なことを知った娘は、泣きながら妻に聞いた「ママ、わたし死んじゃうの？お空にいったお友達の分までわたしは生きなきゃいけないのに約束守れなくなっちゃう。」彼女はわかっていた。このままだとどうなってしまうのかを。だから痛い検査も辛い治療も文句ひとつ言わなかった。

2 学期が始まる前に、学校へ行った。教室に入ると娘は、2 学期に自分が座るはずだった席に座った。そして黒板に 1 つの約束を書いた。「4 年生になったら帰ってくるよ。」その後、クラスのお友達からたくさんの手紙や写真が届いた。みんなが一生懸命祈ってくれた1羽1羽が不揃いな千羽鶴は、いつも娘の近くにある。お友達には帰ってくると約束した。君は約束を守る子。絶対に大丈夫だよ。

【優秀賞】 絵手紙部門

神谷　雅春（かみや　まさはる）さん　　＜千葉県＞

『小さなことに喜びを』

■作品エッセイ（抜粋）

甲状腺乳頭がんと直腸がんになり手術をした時のことを綴ります。60歳を前に首のしこりを感じ、各種検査を受診しました。数日後に細胞の生検検査の結果、悪性腫瘍ありとの診断に耳を疑いました。甲状腺のがん摘出手術後、入院中は点滴での栄養補給ばかり。食事の時間になると周りの入院患者は美味しそうな食事が運ばれます。重湯の患者のお皿には重湯と塩そして名札プレートの 3 点のみです。入院から数日後にお粥に移行しました。うなぎやステーキとは程遠いですが感動しました。お粥はほのかに甘く、ソフトですが噛み応えもありました。入院中にがんに関する各種情報を読んで人生という言葉に向き合う時間が多くなりました。その答えは出ていませんが、このように思うことにしました・・・『これしか出来ない』、『もうこれ以上〇〇することも出来ない』と減点主義になりがちですが、病院食がお粥に変わって昨日より前進したように『あれが出来た』、『今度これをしよう』と加点主義で生きたいと思います。短い人生ですが、コップの残りの水を嘆くより、その尺の中で出来ることを楽しみたいと思います。

【入選】 絵画部門

西村　育恵（にしむら　いくえ）さん　＜福岡県＞

『希望の光を求めて』

■作品エッセイ（抜粋）

この絵は、2009 年にスウェーデンへの一人旅行で撮った写真から着想を得ています。12 月のストックホルムは日照時間が殆どなく、毎日暗くて寒い日々でした。時折ほんの一瞬、分厚い雲の隙間からパッと明るく照らす太陽の光が、すべてを美しく包み込み、暖かくて幻想的な世界が目の前に広がります。

10 年後、私は余命宣告を受けました。子どもはまだ 4 歳、主人にもがんが見つかり、私は仕事を辞めざるを得なくなりました。コロナも流行り始め、「私の人生は終わったのかもしれない」と思いました。治療の選択肢が狭まる中、「どんなに怖くても、希望を求めて進もう」そんな思いで、新治療に命を託しました。

あれから 5 年、治療は順調です。夫婦一緒に、毎日子供の傍で過ごせることが何よりの幸せです。「光」は周りを暗くしなければ見えてこないように、「がん」を通じて人生で本当に大切なものを見つけました。この先どんなに苦しいことが待ち受けていても、その道の先には希望の光が差し込んでいる、そう信じて歩み続けたいと思います。

高橋　よし江（たかはし　よしえ）さん　＜宮城県＞

『キセキ』～すべてに感謝～

■作品エッセイ（抜粋）

2019 年、腺癌ステージ 4B と宣告。すでに転移しており手術はできないとの事。信じられませんでしたが、余命は長くないと覚悟…しかし、先生から治験参加の提案があり、迷う事なく参加を決意。

治験期間中に、長女が「好きな色で好きなように描いてみて」とキャンバスと絵の具を持って来ました。家族全員で楽しく色を重ね、この作品が完成。不安な気持ちを表しているかのように黒が入っていたり、生命力を感じさせる明るい色もあります。この抽象画に『キセキ』と名付け、これをきっかけに絵画も趣味の仲間入りへ！

昨年には脳転移が見付かり治療を受けました。その中でこの癌は、毎日の平凡な生活が一番幸せであると気付かせてくれました。家族や医療スタッフの皆さん、また縁する全ての方々に感謝の思いで一杯です。

誰にでも死は訪れます。不安が無いと言ったら嘘になりますが、限りある人生を癌と共生しながら、有意義で充実した日々を送って参ります！

【入選】 写真部門

熊澤　明子（くまざわ　あきこ）さん　＜高知県＞

『二人で来た道、これからも』

■作品エッセイ（抜粋）

母が膵癌の宣告を受けたとき、父 89 歳、母 85 歳。宣告を受け、もちろん母は頭真っ白の思考停止状態になりました。しばらくの間ふさぎこみもしました。が、持ち前の明るさと我慢強さで“癌と生きていこう”と決心したようでした。父にも「あんたより一日でも長生きして、ちゃんとあんたのお世話してから死にたい」と言います。筋力が衰えないようにとベッドでの体操や、散歩も欠かしません。そして父も、何時であろうと夜中のトイレのときはトイレ前まで母を連れていきます。

ふたりは日なたに椅子を置き、日向ぼっこするのがそれまでの日課。前の道を行く人に「仲の良いお地蔵さん二人」と言われていました。また宣告までは二人そろって畑に行き、農作業に精を出す毎日でした。

昔からドライブも大好きです。この写真はそんなドライブ先での一コマ。娘や息子がいても「わしが押しちゃる」と言って 90 近い父がいつでも車いすを押して歩いています。

結婚してから 64 年。二人で歩いてきた道、これからも。

高橋　賢（たかはし　さとし）さん　＜東京都＞

『最後の手打ちうどん』

■作品エッセイ（抜粋）

昨年の夏、母から連絡があった。「お父さん、肺腺がんのステージ 4 と診断、余命 1 年と言われた」すぐに帰った。息子の久しぶりの帰省を心待ちにしていた父は、時折突いて出る激しい咳を隠しながら、故郷の讃岐うどんを自ら打ってふるまってくれた。「3 杯くらい食べられるか？お代わりあるからな」私はもう 50 代になっているけれど、90 歳の父にとっての私は、いつまでも 10 代、20 代の子どもだった。

思い起こせば、何かあると、父が讃岐うどんを打ってくれた。懐かしさを感じながら一杯食べ終えると、すぐにお代わりを用意してくれた。休んでいてと言いたかったけれど、最後かもしれないとの父の思いが伝わってきたので、父の給仕に委ねた。涙が溢れてきたけれど、見せたくなかったので、汗を拭く風で何度も涙をぬぐった。3 杯目は無理だったけれど、父はとても嬉しそうだった。

その後、父の体重は 10 kg減った。それでも、最後の望みをかけて闘病が続いている。もしよくなったら今度は、私が作って一緒に食べたいし、私の子にも伝えていきたい。

【入選】 絵手紙部門

松原　エミ（まつばら　えみ）さん　＜岐阜県＞

『かぞくのじかん』

■作品エッセイ（抜粋）

40 歳に「腎癌」と診断された。信じられない気持ちと現実味の無さ。5 歳の息子に察してほしくないという思いが先立ち、その日は気丈に振る舞った。夫と息子が寝て、一人になったキッチンで涙がどっと溢れた。

知識がないのでネットで検索する日々。でも腎癌の情報は少なかった。後日、主治医からの丁寧な説明で手術を受ける決意ができた。今まで仕事優先で家族の事を後回しにしたり、夫も休みが少なかったので、息子が生まれてから初めて 3 人で長い時間、手術日まで一緒に過ごした。

癌になって気づいた。私が一番大切なものは家族だ！今しかない息子の成長、3 人で過ごす時間。今までただただ毎日を過ごしていたが、こんな幸せがあるんだと新しい世界が始まったようにも思えた。手術の日が近くなり、夫が「手術が終わって元気になったら旅行に行こう」と提案してくれた。楽しみ、目標ができた。手術を終えて 3 人で旅行に行けた。海で遊ぶ事もできた。旅行中も私、生きているんだと何度も感じた。

一緒に頑張ってくれて、ありがとう。

上野　哲志（うえの　てつし）さん　＜神奈川県＞

『朝日さす』

■作品エッセイ（抜粋）

2024 年で 74 歳になります、昨年 12 月定期検査で食道癌が見つかりました。今年 1 月 4 日入院、翌日手術に、幸い初期発見で 2 週間で退院、転移もなく軽度の食道癌でした。

私のがんの病歴は 2003 年 53 歳の時に顔面眉毛横のほくろの皮膚がん、2008 年（58 歳）胃がんの全摘手術です。胃がんの手術時は死を覚悟し手術にのぞみました、切開摘出で 6 時間かかり、すい臓の炎症等もあり入退院を繰り返しながら、完全な社会復帰まで 5 ヶ月近くかかりました。退院できた喜びと同時に、自分のこれからの生き方を見直す時間にもなりました。

2 年後（60 歳）定年となり嘱託社員での仕事を持ちながら登山・旅、気ままに、想いのままに今までできなかった事をやり 70 代には絵手紙教室に通いまた県立公園内のボランティア活動にも参加し、人生の残りの時間を大事に過ごしたく思っております。

今年入院した病室の東側窓から上る朝日には感動しました！！

『生きる力をもらう』日の出を描いてみました。